□12月24日礼拝説教（隅野瞳牧師短縮版）
「すべての人の喜びは飼い葉桶の中に」（ルカ2:1～12）

約二千年前に神の御子イエスは人間として、私たちの歴史の中にお生まれになりました。ローマの支配下にあったユダヤの人々、主イエスの両親となるヨセフとマリアも、勅令によって自分の出身地で住民登録をすることになりました。ベツレヘムに着いてしばらくするとマリアに出産の兆しが起こりますが、空いている宿屋はありません。マリアは家畜を飼う場所で初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせました。

主イエスがお生まれになった夜、ベツレヘム近郊に羊飼いたちが群れの番をしていました。羊飼いは律法を守ることが難しいためユダヤの宗教的に蔑まれ、住民登録からももれていた、つまりローマの社会的にも属する場所がありませんでした。しかしだからこそ神は天使を直接彼らに遣わして、救い主の誕生を伝えたのです。神の救いからはどんな人ももれることがないからです。神を離れて自分中心に生きる道を選び、傷つけ合い生きる意味を見失った私たち人間を神は愛し、罪から救うために御子を世に遣わされました。御子は私たちの罪を担って十字架にかかってよみがえり、神と共に生きる道を開いてくださったのです。

羊飼いたちに示された救い主のしるしは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子でした。天使が去った後彼らはベツレヘムに急ぎ、救い主を探し当てました。求めるならば誰でも会いに行くことができる、救い主はそのような方です。乳飲み子イエスを見て、この方が自分たちのための救い主であると確認した羊飼いたちは、あまりにも大きな喜びを抑えておけず人々に話しました。天使の告げた救い主の誕生の喜びを羊飼いたちから聞いて、ヨセフとマリアも信仰が強められたことでしょう。

主イエスを救い主と信じる時、私たちの内に主イエスが住んで、神の愛の見えるしるしとしてくださいます。そのままの自分という飼い葉桶を差し出すなら、すべての人を救うキリストが宿ります。そこに人々がやって来て御子に出会い、次の人に救いの喜びを伝える者となっていくのです。神にそんなふうに用いていただけるなら、こんなに感謝なことはありません。主が「こんな私が神の救いのしるしとされたんですよ！」と喜んで言い合える私たちとならせてくださいますように。（終）